

アメリカの地域学習における オーラル・ヒストリーの研究 — Georgia 州 Rabun County における “Foxfire” magazineを事例として —

小川 浩之*

1. はじめに

地球上に人類が登場してから既に約200万年を数えるが、その間われわれは実に様々な文化を生み出し、発展させてきた。その中でも「文字」の発明は、人類にとって最も画期的な事件であったといえるだろう。人間は文字を使うことによって自らの思想や行動を著しく発展させ、それらを時間と空間を越えて他の人々に伝達する術を確かなものにしたのである。

しかしその一方で、文字を持たない社会において文字を媒介としない情報伝達が盛んに行なわれ、様々な文化が創造されて後世に伝えられてきたこともまた事実である。むしろ、人類の歴史を俯瞰で眺めるなら、文字を用いなかった人々、もしくは文字を持たなかった社会のほうが有文字社会よりも遥かに大きな部分を占めていることに気がつくであろう。さらにいえば、文字を用いなかったか、あるいは今も用いていない社会は世界中になお数多く存在しているのであり、

「人類の生活の中の無文字性の側面」(川田順造)もまた現代の文字社会のなかに根強く残っているのである。⁽¹⁾ 歴史学や民族学(民俗学)がこうした無文字社会の歴史、もしくは有文字社会の中の無文字的側面に少なからぬ学問的関心を向けている今日において、文献史料以外の史料、すなわち口碑 narrative や口承史 oral history が重要視されてきているのも故無きことではない。それは、主として文献史学の成果に依拠してきた従来の歴史観に、無文字社会、もしくは有文字社会のなかの無文字的側面からの視点を導入し捉え直そうとする試みに他ならない。そこで本稿では、社会科教育において文献史料以外のいわゆるオーラル・ヒストリー(口承史)を学習の教材や方法論として導入することの意義と課題を、アメリカ合衆国における実践例を通じて見てゆくことにする。

1940年代に、先ず政治史の分野に始まったアメリカにおけるオーラル・ヒストリー・プロジェクトは、1960年代後半に入ると社会史・民衆史の発達を背景として個人や民間のレベルによる組織へとその裾野を広げ、地域史や家族史などを対象とした地域密着型の実践を数多く輩出した。その中であって初等・中等教育の場に教育手段としてオーラル・ヒストリーの方法論を導入しようとする試みが生まれしてきたのである。例えば、1967年にはヴァーモント州の州都モンピリアにおいて「教育の手段としてのオーラル・ヒストリー」と題される集会が開催されたが、そこには、今後の歴史教育・社会科教育の方向性を「教科書に書かれた内容を暗記させるのではなく、生徒自らがじかに過去についての証拠に直面し、それに様々な解釈を加える」⁽²⁾ 方法に見出そうとする歴史や社会科の教師が多く参加している。この集会は、アメリカ歴史協会など専門家の

* 茨城県立上郷高等学校

協力のもとに行なわれた啓蒙的な学習の会であり、彼らは集まった教師たちにオーラル・ヒストリーの方法論の有効性と問題点を説くと同時に、参加者を交えてそれを教育の場に導入することの是非について意見を交換している。⁽³⁾ こうして教育界にオーラル・ヒストリーに対する関心が高まり、1960年代末頃から全米各地の中等教育機関において地域社会の歴史の収集が行なわれ始めた。その動きは1970年代に入ると更に本格化する。

現在、アメリカの初等・中等教育の場では、社会科を中心として英語、芸術、音楽など様々な教科・科目の学習活動のなかにオーラル・ヒストリーが導入されているが、その利用のタイプは大きく分けて、①オーラル・ヒストリーによる学問的成果を、授業に新しい光をあてる教材として利用するタイプと、②児童・生徒自身が実際にインタビュー活動を行なって、地域社会に遺された歴史や文化的伝統を収集するタイプ、すなわち取材の方法論を学習活動に生かそうとするタイプ、の2つに分けられる。これら2タイプは、少数民族の神話・伝承や地域社会の文化的伝統など、学校教育のなかで等閑視されてきた有文字社会の「無文字性の側面」に目を向け、積極的に取り上げていこうとする姿勢においては共通しているが、後者がいわば「生」の素材を自ら取材・文字化・編集することによって自ら歴史伝承や文化的伝統を定着させる作業に携わるのに対し、前者は学者や専門家が集めた史料をいわば二次的に利用するにとどまるのであって、学習の対象に働きかける積極性と関わり合いの深さにおいて両者の相違は著しいといえる。そこで、本稿では学習活動としてより動的かつユニークだと思われる②のタイプを扱うこととし、その中でも最も成功した例であり、1970年代に全米各地の教育現場にオーラル・ヒストリーの実践を普及させる最大の原因ともなったジョージア州における実践、“Foxfire”を事例として取り上げる。

その知名度、成果、そして影響力において他のオーラル・ヒストリー・プロジェクトを圧する存在である“Foxfire”は、しかしながら先に挙げたヴァーモント州における動きとは違い、大学などアカデミックな歴史学とは全く乖離した状況から生じた。しかもそれを指導した英語教師エリオット・ウィギントンには、自著の中で“Foxfire”を始めるまで、私はフォークロアやオーラル・ヒストリーが数世紀にわたって収集されてきたことを全く知らなかった⁽⁴⁾と述べている通り、フィールドワークの専門的な方法論については素人だった。それだけに、初期の“Foxfire”には学問的に不備な部分がかかなり多いし、その後の活動も試行錯誤の連続であった。しかしその不完全な筈の活動が、専門家によって指導された他のプロジェクトを差し置いて人々の耳目を集め、急速にそのコンセプトを広げていったことも否定しがたい事実なのである。では、我々はこの事実をどう受けとめれば良いのだろうか。“Foxfire”の何がそれほどまでに人々をひきつけ、後発プロジェクトをあまた登場させることになったのだろうか。それを明らかにするため、以下の部分において“Foxfire”の活動が生じた背景、その活動内容などについて簡単に見て行くこととする。

2. “Foxfire”の成立

“Foxfire”とは、1967年にジョージア州レイバン郡にあるレイバン・ギャップ・ナクーチー・スクール Rabun Gap-Nacoochee School で英語と地理を教えていた教師エリオット・ウィギントン Eliot Wigginton によって始められた、生徒たちが作る雑誌である。“Foxfire”発足前夜の

レイバン・ギャップ校は、学校側の生徒管理の行き過ぎと、生徒側の無気力・無関心および学習不適応（同校のある南部アパラチア地域は貧困世帯が多く、ドロップアウト率も非常に高かった）という、まさに今日の学校問題にも通ずる状況下に置かれており、学校では生徒たちが授業に全く興味を示さず、問題行動が後を絶たなかった。当時彼が大学時代の旧友に宛てた書簡の中には、以下のような記述がしばしば見られる。「昨日また寮の生徒が放校になった——度重なる喫煙のためだ」「こんなことを全て書き出そうとしたら、膨大な時間がかかってしまうだろう。とにかく今、僕は疲れ果てている。」そして以下は彼の回想である。「その頃を振り返ってみれば、教職を放棄して何か他の仕事に移るのだという希望だけが、私を生かしていたようなものです。」⁽⁵⁾

当初は生徒たちの問題行動に対して「校長室送り」などの懲罰で以て対抗していたウィギントンも、やがてその行為が問題を解決するどころか却って生徒たちの怒りに火を注ぐばかりであることに気づき、次第に学校側の生徒管理方法に対する疑念を強くしていった。わけても決定的だったのは英語の時間に課した作文であった。それは、学校や教師に対して日頃思っていることを生徒たちに匿名で書かせるものであったが、その作文の内容から、彼は誰よりも生徒自身が学校のこうした問題からの助けを求めていること、そして自分たち教師が状況を変えようとする努力と意欲に欠けているばかりかそこに甘んじてさえることを思い知らされたのである。以下に当時の生徒の作文を示してみる。

「誰かが私を成長させ、そして心を開く手助けをしてくれればいいのに。でなければ、私は私の人生を見失ってしまいそうです。私はどうやって考えればいいのかわからないし、手に入れたものをどうやって使えばよいかもわからない。自分を変えたいけど、それには助けが必要なのです。」

「私が授業内容に遅れ始めても、先生たちはけっして私を手助けすることに時間を割こうとはしません。もし助けてくれていれば、わたしはシニアに進めたでしょう。もし誰かがうまくやれば、その人は先生の注目を一身に受けて先生のお気に入り（teacher's pet）になります。彼は進級できますが、私は出来ません、そしてそのことで傷つくのです。

先生方は教室の中でも外でもあらゆる生徒たちと共に過ごすべきなのではないでしょうか。なぜそうしないんですか。なぜそうしないんですか。」⁽⁶⁾

生徒たちの生の声に接して、ウィギントンは従来までの態度を変えた。すなわち、問題を生徒の責任に転嫁したり自分の置かれた立場をいたずらに嘆いたりする前に、自らの授業を改善することによってそうした生徒たちの学習意欲を喚起し、彼らを救おうと決心したのである。彼は各クラスにおける投票によって選ばれた生徒の代表者たちを集め、彼らと共に授業をより豊かで興味を持てるものにするための活動のアイディアを模索し始め、やがてブレインストーミングと度重なる議論の過程で出された21ものアイディアの中から、「雑誌作り」という案に辿りつく。

学校の承認を得て計画は始動した。当初、彼らは予算から録音器材まで全てを自分たちで揃え、また放課後などの空き時間に近在の古老などにインタビューすることから活動を始めている。このプロジェクトは当初から生徒たちが中心になって運営されていたが、そのことは雑誌の命名にも窺うことができる。多くの候補の中から生徒たちが選んだのは“Foxfire”。これはアパラチア山中の洞窟に自生する「ひかりごけ」を意味する言葉であり、ここには早くも自分たちの住む地

域の独自性を強調したいという生徒たちの自尊心の芽生えが感じられて興味深い。ウィギントンはその名称が持つ魅力についてこう述べている。

「多くの生徒たちがそれ〔Foxfire〕を以前に見たことがあったし、見たことがないものもそのようなものが生き続けているということに魅了され、あるいはその言葉の響きを好んだのである。どんな場合でも、この名前は全員に喝采をもって受け入れられた。これに関していい加減に反応したり無視したりするものは一人としていなかった。程度こそ違ふとはいえ、それぞれの生徒がその言葉が喚起するドラマに夢中になり、教室の雰囲気は一つになった。」⁽⁷⁾

しかし、“Foxfire”という名称が生徒たちの間に好評を博した最大の理由は、それが彼ら自身によって選ばれたタイトルだったからであろう。彼らは、雑誌作りの様々な作業を自らの決定の下に行なうことによって徐々に自己を表現するこの喜びに目覚め、そこに以前までの学校生活においてはなかなか見出せなかった「自由」を感じ始めていたのである。

以上のような経緯を経て、1967年の早春、エリオット・ウィギントンとレイバン・ギャップ校の10学年の生徒たちが中心となって作った72ページにわたる季刊誌“Foxfire”の1号が完成した。発売されるや否や、雑誌は地域の人々の間にちょっとしたセンセーションを巻き起こした。最初の600部のコピーはたちまち完売し、追加注文がひきを切らない状態となったのである。こうして、プロジェクトは公にその姿を現したのである。

3. 活動の目標

(1) 活動全体における目標

これまでにウィギントンが残した少なからぬ文章のうち、“Foxfire”の活動が如何なる目標を以て発足したかという点について最も端的に述べているのが、1972年に発表されたThe Foxfire Bookの序文である。そこには、次のような一文が載せられている。

「…この地域に住む『祖父』世代の人々は主として口承の文明 (oral civilization) に属しているため、様々な情報は口頭で、もしくは実地教授によって世代から世代へと伝えられてきたのであり、その殆どが文字として書き残されていないという大きな問題がある。彼らが世を去るとき、雄大な狩猟についての炉辺話も、何千もの子供達に眠れぬ夜を過ごさせた怪奇譚も、幾年もの試行錯誤を経て獲得した自給自足の手の混んだわざの数々も、——中略——すべてが彼らと運命を共にしてしまうのである。しかし、それは何という損失であろうか。

もしもこれらの情報が守られ得るものなら、何はともあれ、それは今守らねばならない。そしてそれを調査し保存するのは彼らの『孫』たちであって、外部から来た大学の調査者ではないのである。調査の過程において、『孫』たち〔そして私たち〕は、自らのルーツ、文化遺産などについての大変貴重でしかもユニークな知識を得るのである。彼らは自分たちの家族——1970年代を前にして等閑視されてきた人々——を発見するであろう。彼らは、テレビにも自動車にも飛行機にも無縁なままに、完全自給自足という信じがたいやりかたによって生きぬいてきた人々であって、そこには私たちが二度と再び得ることができそうもない生活に対する視野が見出される。彼らは独立独行について、人間の相互依存について、そして人間の精神について、傾聴に値する言葉を持っているであろう。」⁽⁸⁾

ここに示されている、「失われつつある地域社会の文化遺産を、その孫にあたる生徒たちが取材・継承することによって保存または記録する」という目標は、まさに“Foxfire”の活動の何たるかを最も良く言い表したものであるが、この目標は二つの要素から成り立っている。すなわち、前半部では①「文化遺産の保存・継承」に焦点が当てられており、後半部では②「生徒が主体となった取材活動の発足」について言及されているのである。当初から目標の中にこれら二つの要素が併存していた理由は、活動成立の特異な背景に求められる。“Foxfire”が誕生する背景には二つの「危機」が存在した。ひとつは、先に述べた通り学校そして生徒の危機である。いま一つは南部アパラチア地域の伝統文化喪失の危機である。従って、その打開の方策として登場した“Foxfire”には、必然的に両者の要素が混在することになり、結果として、「地域の文化遺産に学習の動機づけとしての焦点をあわせる」⁽⁹⁾という他に類を見ない独創的な学習プログラムが生まれたのである。それゆえ“Foxfire”の活動を根本において支えるコンセプトも当然ながらこの二つの要素を含むものとなっているし、またこれらが結びついてこそ、それは“Foxfire”的なものと言えるのである。

(2) 生徒の具体的な達成目標

次に、上に示した大目標の下に、生徒たちが雑誌作りの活動に携わることによって達成を期待される下位目標を見て行きたい。⁽¹⁰⁾

- ① 「生涯を通じて役立つ職業的技能を身につけること〔撮影、現像、マーケティング、印刷、タイプ、文字起こし、文章技術、デザイン、組織運営と管理、広告、演説、博物館学、地域社会におけるリーダーシップ、投資、など〕。」
- ② 「コミュニケーションの方法としての視覚芸術と言語芸術に関する意識を深め、技術を身につけること。」
- ③ 「協同作業の中において、個人の創意を生かすとともに、各々が果たすべき責任感を意識して行動する姿勢を身につけること。」
- ④ 「学習活動に対する学際的な視野を身につけるとともに、個々の学科の相互関係を意識すること。」
- ⑤ 「自らが住む地域社会に対して誇りと尊敬を持ち、自分もそこに所属しているという帰属感を育てること。」
- ⑥ 「積極的に新たな問題を調査したり、新しい人間関係を確立したり、新たな体験を求めるために必要とされる探求心・探求的な態度・能力を身につけること。」
- ⑦ 「社会変化を敏感に感じ取り、その過程に積極的に参加する姿勢を養い、自らの未来を自らの手で決定する力を身につけること。」

それぞれの目標について見てみると、先ず①②は“Foxfire”での諸活動を通じて生徒が具体的に獲得すべき技術的側面の目標について述べたものとなっている。特に①は、この活動に職業訓練過程としての役割があることを明示している。そして③④では、活動によって生徒が身につけるべき学習に対する基本姿勢が示されている。特に④は、元々課外活動として発足した“Foxfire”が備えている学科の垣根に収まりきらない破格の広がりを「学際的〔インターディシ

プリナリー]」という言葉で表現したものである。確かに“Foxfire”には（それがカリキュラムとして定着した後においても）特定の各教科の枠には当てはまらないスケールがある。文章や会話を扱うという点においては「英語」的であるし、写真やイラストなどのグラフィックアートは「美術」の授業としてもふさわしい。職業訓練過程としての側面もあれば、動植物や環境問題など自然科学にもあい通ずる問題も取り上げ、そして全ての活動の結果として物事に対する見方・洞察力を養うという点では、それはまさしく「社会科」のようでもある。ウィギントンは実際に他の学科の担当教師の協力の下に活動を進めているというが、教師・生徒双方が学科を越えた協同作業に携わることによって、すべての学科に通底する学校教育の大きな目標の存在を実感することができるのではないだろうか。

①～④までの目標が活動全体を通じて獲得されるべき知的技能についてのものに対し、⑤は特に地域社会およびそこに住む人々（特に老人）との関係や、彼らの言葉から生徒が学ぶこと、すなわち“Foxfire”の活動を通じて生徒たちが身につけるべき態度・能力について述べたものとなっている。特に⑤の目標は、自分が所属する地域社会の文化の知識に乏しく、とするとそれを恥と見做しがちなレイバン郡（そして南部アパラチア全域）の若者にとっては、自らの世界観の形成やアイデンティティーの確立にも係わる問題である。それゆえ、「自らの住む地域に対する誇りと所属感を育てる」という目標を達成するためには、自文化を知ると同時に、地域が爾来被ってきた偏見・ステレオタイプ（閉鎖的、暴力的など）を克服することも必要となるのである。

“Foxfire”の活動を通じて獲得された技能・資質は、最終的に生徒たちが社会に出た際に活用されるべきものであり、⑥⑦においてはその点が特に明示されている。そして、“Foxfire”の社会機能に関する生徒達成目標とも呼ぶべきこの二つの項目からは、ジョン・デューイ以来の革新主義教育観の系譜を強く感じることができる。次に挙げる文は、デューイ自身が学校が果たすべき最終的な目標について述べたものであるが、ここに提示された内容は先の目標に少なからぬ影響を与えているのではないだろうか。

「学校から社会へと出て行く若者が、彼らが担わなければならない建設と組織化という大きな仕事に参加することができるように、洞察力と理解力を発達させること、そして、その洞察力と理解力を実際に際して効果的に用いさせる為に、行動する態度と習慣を身に付けさせること。」⁽¹¹⁾

学校教育が持つ社会的機能に早くから注目していたデューイは、将来の主権者たる生徒たちに新たな社会秩序の創造に必要とされる態度、思考の傾向（反省的思考）、目的意識などを身に付けさせることの重要性を強調し、社会・経済の調査を含む問題解決型のカリキュラムの導入を提唱しているが“Foxfire”はその思想を引き継ぎ、具現化しようとする試みを行なっている活動と位置付けることができよう。

ここで更に注目されるのが⑦「社会変化への参加」である。1970年代に入って激化した別荘開発ブームによる地価の高騰と環境破壊によって、レイバン郡の住民は地域に関する既得権を次々と失っていったが、ウィギントンはこれを地域社会が直面する最大の危機と捉え、その将来の主権者たる生徒たちの間に早くから社会参加の機会を与えて彼らの政治意識を高めようとしたので

ある。その結果“Foxfire”においては出版物の著作権料を利用した土地投機や地域開発のプロジェクト(マウデン・シティー・プロジェクト)など、学校教育としては他に類を見ないユニークな活動が行われるに至ったのである。

4. “Foxfire” magazine の内容、およびそこから発生した諸活動

生徒たちの取材・編集活動の具体的な成果たる“Foxfire” magazine に掲載された記事の内容は、大きく分けて、(1)生活・職業に関するもの、(2)南部アパラチア地域の特異な文化遺産に関するもの、(3)“Foxfire”の取材から派生した生徒活動、の3つに分類できる。ここではそれぞれの内容の持つ特徴を概観し、生徒たちがそこから何を学んだのかを明らかにする。

(1) 生活・職業に関するもの

地域の文化的伝統を扱う際に先ず重視されるのは、生活(職業、衣食住を含む)に関連する様々なトピックであろう。実際“Foxfire” magazine の記事の中に最も数多く登場するのがこの話題なのである。しかし、現代の若者(特に大家族の伝統を持たないアメリカの人々)にとって、伝統文化やそれを継承してきた老年世代の人々に注目したり実際に触れたりする機会は以外に少ないし、たとえ日常において絶えずそうした伝統文化に囲まれて生活しているとしても、彼らが必ずしもその重要性を認識しているとは限らない。伝統文化の宝庫とも言えるレイバン郡にあって、基本的に事情は同じである。ウィギントンによると、活動発足当初のレイバン・ギャップ校では「地域の生徒のほとんどは寄宿舎に入っている生徒と同様に、この地域の古くからの慣習についてはほとんど知らなかった」⁽¹²⁾ である。しかし、アメリカの他の地域に比べて激しい社会変化を経していない同地の場合、その気にさえなれば生の素材に触れ、収集することが可能なのである。

“Foxfire”において実際に取り上げられた「生活・職業」に関するトピックは、丸木小屋作り(生徒たちも実際に建築に携わっている)、井戸掘り、銃作り、馬の交易、バター作り、豚の屠殺とその調理におけるレシピ、自家製の石鹼作り、瓢箪製のひしゃく作り、バンジョー作りなどと、そしてそれぞれの老人自身が自らの生い立ちやそれまでの人生におけるエピソードを語る「自分史」インタビューから構成されている。こうした地域の文化遺産を取材・編集する過程において、生徒たちは先ずそれらを保存し受け継いで行くことができる。たとえば、1969年の夏休みに取材された「丸木小屋作り」Building a Log Cabin は、観光客目当てのイミテーションではない「本物の」丸木小屋(植民時代からの様式を受け継いだ建築様式に依るものである)の建築法が、生徒たちがじかに取材し、自ら手書きした詳細な設計図と説明文とによって記されており、その「若者による文化の継承」の姿勢のみならず、学術的にも価値を認められている。また、有り合わせの布切れを一つ一つ縫いあわせて作る刺し子の掛け布団である「キルト」の作り方の取材についても同様のことが言える。大勢の女性の協同作業によって作られるキルトは、場所、時代、用途などに応じてその縫い方に独自のパターンを持っており、全ての品が唯一無二のオリジナルとなっているが、それだけにその製法が彼らの直接の子孫にあたる生徒たちによって取材・継承・継承されたことは大きな意味を持つ。伝統文化の芸術的価値は、生活に密着し機能する

ことによって初めて生まれるからである。もしその技術が学者や研究者の研究の対象になっても、その生命はあくまでも大学の研究室や博物館の中に留まるのである。ワシントンのスミソニアン博物館には実際に年代物のキルトが数多く展示されているそうであるが、それが如何に優れた芸術的価値を持つものであっても、地域との結びつきを奪われ、実用性を失ったキルトは、その生命を人々の手によって伝えて行くことはできないのである。“Foxfire”の取材は、調査対象へのアプローチの仕方において、専門的なオーラル・ヒストリーやフォークロア研究者の調査とは比べものにならないほど学問的に不備である。しかし、学力において全国平均を大幅に下回る高校生たちがそれを承知で取って地域の生活文化を取材する意味は、まさにその「継承」という点に求められるのではないだろうか。

また、生活や職業の取材を通じて、生徒たちが地域社会が経てきた社会変化を認識したり、古い時代を生きた人々の物の見方・考え方をじかに学び取って、その「心性」にじかに触れることができる点も見逃すことができない。たとえば先に挙げたキルト作りの取材を通じて、生徒たちは地域社会の歴史に触れることができるだろう。最初の白人入植者によって北米大陸に持ち込まれ、人口の西漸と社会の拡大にともなってタウンからタウンへ、コミュニティからコミュニティへと徐々にその輪を広げて行き、縫い方のパターンを豊かなものにしていったキルトは、女性たちによって記された地域社会の「歴史」そのものだからである。‘A Quilt is Something Human’（キルトはどこか人間のよう）の記事において、生徒たちは次のような文章を記しているが、そこには地域の文化遺産を取材する彼らの基本姿勢が端的に示されていると思う。

「キルトは人々から人々へと手作りで受け継がれてきたという単純な事実がある。その制作のあらゆる面が、与え、分かち合う〔giving and sharing〕ことによって成り立ってきた。端切れを持ち寄り、パターンを決め、針子〔quilting bees〕たちが集まってそれを縫い合わせ、最終的にそれを仕上げるまで、キルティングは本質的に人間の営みなのである。キルトには人間について、友情について、地域社会について、家族について、家について、そして愛について語りかけてくる何ものかがある。」（傍点筆者）⁽¹³⁾

このコメントからは、彼らの目的がただ地域の文化遺産を蝟集・保存することにあるのではなく、その中から地域社会の文化を形づくってきた「人間の営み」を見出そうとしていることが如実に窺える。

(2) 南部アパラチア地域の特異な文化遺産に関するもの

フロンティア時代の生活様式を濃厚に残すアパラチア地域は、爾来アメリカ人の憧憬的になると同時に、「暴力的」「無知」などといった偏見・ステレオタイプの対象ともなってきた土地である。エリック・エリクソンによると、孤立した少数の社会集団は社会的に有力な人々（この場合アパラチア以外の土地に住むアメリカ人）によってつくられた偏見やステレオタイプを受け容れやすく、しかも、そのことによって自らの地域に対する否定的な文化的アイデンティティを形成しがちだというが、⁽¹⁴⁾その傾向は“Foxfire”の生徒たちや取材された老人たちの中にも見出される。したがって、生徒たちの間に自らが住む地域と文化に対する誇りと愛着を育てることを活動目標の一つとしてきた“Foxfire”では、そうした悪いイメージが形成される主な原

因となってきた特異な文化遺産（ウイスキーの密造、蛇をつかむ信仰儀式、信仰療法など）を取材し、その正確な姿、G.W.オルポートの言葉を借りるなら「集団の歴史や特徴や偏見の本質についての科学的知識」⁽¹⁵⁾を伝えることによって、巷間に流布している虚像に対して反証を提示してきた。そのことによって、生徒たちは記事を読む全米の読者（他地域に住む人々）の「人格構造的変容」をはかり、彼らの「偏見」の是正を試みただけでなく、自らの否定的アイデンティティーをも克服しようとしたと言えるであろう。

取材の結果、それまで世間の好奇の目に対して少なからぬ怒りを抱いていた老人たちは、自らが伝えてきた文化のありのままの姿が記録されたことを喜び、またそうした文化を恥と見做す傾向にあった生徒たちも、その実像を自らの手で取材・紹介することによってその存在価値を理解し、誇りを以て認識するようになったようである。例えば「芸術としてのウイスキーの密造」Moonshining as a Fine Art において、生徒たちは終始一貫して触法行為である「密造」を消えつつある貴重な文化遺産と捉える態度を貫き通し、そのことによって「暴力的な無法者」と恐れられた密造者の口から、かつて聞かれなかったような様々なエピソードを引き出している。それはすなわち、①人々が密造に携わらねばならない理由（農業に適さない痩せた土地、貧困など）、②上質のウイスキーを作ることに對する誇り、③密造者とそれを摘発しようとする保安官との掛け引きと友情、という、密造にまつわるきわめて人間的な側面についての証言であり、密造の歴史、製法に加えてそうした人間的なドラマにまで分け入ることによって、“Foxfire”は以前の文献が明らかにできなかったウイスキーの密造の「全体像」を追求し、そこに係わる人間的感情の機微を描きだすことに成功したのである。そしてそのアプローチこそが、密造に関する否定的イメージを克服し、それを誇りへと転化するためには必要だったのであろう。最後に、このトピックの成功を示す好個の事例としてバック・カーヴァー（かつて密造を行っていた）、ビット・カーヴァー（“Foxfire”の生徒）父娘の証言を挙げておきたい。

「本が出版されることによって私達が傷ついたことは一度もない——特にウイスキーの密造に関しては。私は、本が出版されたことによって、なぜ我々が密造をしなければならなかったのかを大勢の人に知ってもらえたと思う。そして、それは必要なことだったのだ。」（バック・カーヴァー）

「私達の家族は貧しくて、父は密造をしていました。“Foxfire”に携わることで、私は父が密造をするのには理由があったことを理解するようになりました。父は私たち家族を養うためにそれをしていたのです。そのことがわかったとき、私は父を誇りに思い、そして父の造ったウイスキーを誇りに思いました。父は安酒は造らず、常に上質のウイスキーを造りました。安酒を造って楽にひと儲けすることもできたはずなのですが、決してそのようなことはしなかったのです。」（ビット・カーヴァー・キンボール）⁽¹⁶⁾

(3) “Foxfire”の取材から派生した生徒活動

“Foxfire”の取材を通じてウィギントンと生徒の間に生まれた問題意識は、時として机上での編集作業を越えて外部社会への積極的な行動としてあらわれ、結果として“Foxfire”に「オーラル・ヒストリーを扱う雑誌作り」という基本的な枠組みの中には収まり切れない沿革を与える

に至った。その中でも特に注目されるのが、1977年に始まった「マウンテンシティー・プロジェクト」である。当時レイバン郡では別荘地開発がピークを迎えており、不動産業者による土地の買い占めが盛んに行なわれていたが、こうした動きに対し、ウィギントンは危機感を深めていた。彼は、地域社会の住民がその地域の土地に対する保有権と決定権を失えば、“Foxfire”の活動が守り育てようと企図している地域の伝統文化の存在基盤も喪失すると考えたのである。そこでウィギントンは、“Foxfire”の印税を利用してレイバン郡にいくつかの土地を購入し、それを生徒（すなわち地元の若者）自身の決定のもとに開発・利用できる場にしようとした。こうして、生徒たちが「社会変化を敏感に感じ取り、その過程に積極的に参加する姿勢を養い、自らの未来を自らの手で決定する力を身につける」という目的の下に、学校教育のプログラムの中に地域開発事業を取り入れるという教育史上類を觀ない実験的なプロジェクトが開始されたのである。この試みは、地域住民に活動の趣旨を理解してもらえず、彼らの十分な協力が得られなかったことや、“Foxfire”シリーズの売り上げの減少による資金不足のため結局失敗に終わったが、ここに示された「社会変化」に対する積極参加の姿勢もまた“Foxfire”の活動の中にあって見逃すことのできない側面の一つであろう。

5. おわりに

1968年に売り出された“Foxfire”magazineは、地元において大変な好評を博した。最初に印刷した600部は瞬く間に売り切れ、その後も追加注文が後を絶たないという状況になったのである。地域の文化遺産を大きく取り扱ったこの雑誌は、レイバン郡周辺の地域に住む人々（特に取材を受けた老人たち）にとっては自文化に対する誇りを呼び覚ましてくれるものであったし、ただでさえ変化に乏しいこの地域にとってはかなり刺激的な出来事だったのである。さらに、地元での好評を受けて1972年にニューヨークの大手出版社から“Foxfire”magazineのアンソロジーであるThe Foxfire Bookが発売されると、反響は瞬く間に全米中へと広がった。同書は当初から好調な売れ行きを示し、200万部以上のベストセラーとなったのである。その結果、学校には多くのマスコミ（新聞、雑誌、テレビ局、フリーのカメラマンなど）が取材に訪れるようになり、また全国の読者からは3000通を越える様々な手紙が寄せられた。その中には、自らの学校でも“Foxfire”と同様のプロジェクトを始めたいという教師からの問い合わせも多数含まれており、これ以降、Cultural Journalism（文化に関するジャーナリズム）と総称される雑誌作りの活動が全米の教育現場において盛んに行なわれることになったのである。

Cultural Journalismとは、生徒たちが地域社会に住む人々からその歴史や文化についてのオーラル・ヒストリーを取材し、それを雑誌として販売する活動を意味する用語であり、“Foxfire”の登場を受けて用いられるようになった。勿論それ以前の学校教育の場においても雑誌作りの活動例は見られるし、オーラル・ヒストリーの調査活動についてもアメリカの教育界は“Foxfire”登場以前から「教育手段としてのオーラル・ヒストリー」に大きな関心を抱いており、実際に大学などの高等教育機関では学生によるプロジェクトが既に軌道に乗っていた。そして“Foxfire”が発足する前後の時期になると、全米各地の中等教育の現場においてもアカデミズムと結びついたオーラル・ヒストリー導入の試みが行なわれるようになっていたのである。しかし、そこにお

いては学問的な厳密さや専門的な技能の習得が重視されるあまり、活動は遅々として進展しなかった。大学で行なわれている学問の方法論と目標をそのまま中等教育に移しかえようとしても、生徒の能力の差や時間的余裕の有無など条件の違いのために、どうしても無理が生じてくるのである。従って、オーラル・ヒストリーが中等教育の場に根付くためには、それ自体が独自の方法論を持って始動する必要があった。そして“Foxfire”は Cultural Journalism という独創的な新スタイルを提示することによって、いち早くそれを具現化することに成功したのである。

Cultural Journalism がオーラル・ヒストリーの方法論を中等教育の現場へ導入することに成功した最大の理由は、そこに「雑誌作り」の過程を加えたことにある。そのことによって活動の中には多様な作業過程（インタビュー、テープ起こしだけでなくデザイン、レイアウト、撮影など）が用意されることになり、生徒が自己の創造性や能力を生かす選択肢も増えたのである。“Foxfire”の例を見ても、このことが生徒の興味を刺激し、彼らを活動へ積極的に参加させるにあたって大きな貢献をしたことは明らかであろう。そしてもう一つ、取材結果を雑誌の形にして販売することで、彼らは地域社会から一方的に情報を収集するだけでなく、その成果を還元することができるようになった。このことは学校と地域社会との間に相互作用的な関係を育てると同時に、生徒たちが自らの取材の成果を広く一般に問う機会を得たことをも意味する。そしてその反響が生徒たちの学習意欲を高め、彼らの間に自信を生むことになるのである。

Cultural Journalism というこの新しい学習活動が如何に中等教育の要求に答えたものであったかは、その全米の教育現場への急速な普及ぶりに如実に表れている。1975年の春には実践例はアメリカ国内で7例であったものが、2年後の1977年には80に増え、更に1980年までには同様の活動は全米及び海外（ハイチ、ジャマイカなど）において実に200以上を数えたのである。“Foxfire”の研究者であるサド・シットンは、中等教育の場において“Foxfire”型の Cultural Journalism を実践している教師たちに活動を始めた動機についての質問を行なっているが、多くの者が「活動を通じて生徒と教師との関係を改善したかったこと」、「活動によって生徒の自信と自尊心を養いたかったこと」、「活動が地域と学校とを結ぶかけ橋になると考えたこと」⁽¹⁷⁾などを理由として挙げたという。この結果から見ると、教師たちは各々の教育現場が抱えている諸問題を解決する必要を感じ、その方策を“Foxfire”タイプの雑誌活動に求めたのだといえるが、それは“Foxfire”発足の動機にもあい通ずるものであった。すなわち、Cultural Journalism の登場と普及の背景には1960年代以来続いてきた「学校の危機」があり、それを打開しようと努力を重ねる教師達の存在があったのである。“Foxfire”はまさにこうした問題に対応するものとして誕生し、確かな成果を残してきたのである。その意味において、“Foxfire”は現代の教育の在り方に一つの画期をなすものであったと言える。

最後に、オーラル・ヒストリーの方法論（Cultural Journalism には限らない）を教育手段として採用することの意義について、“Foxfire”という事例の研究を通じてわかったことを中心に簡単にまとめてみたい。それは大きく分けて三つ考えられる。

① 口碑を教材として扱うことによって、歴史・社会事象に新たな光を当てることができる。この「歴史教材」としてのオーラル・ヒストリーの有効性という側面は、本論において取り上げた“Foxfire”に代表される「調査の方法論」としてのオーラル・ヒストリーの導入だけでなく、

学問的成果としてのオーラル・ヒストリーについても当然当てはまることである。口碑や伝承を授業の教材として用いることによって、初めて「無文字社会」の歴史に光を当てることができるし、また有文字社会に存在する無文字性の側面、すなわち神話、伝承、俗信などに込められた無名の大衆の世界観やエートスなどに分け入ることが可能になるのである。そのことは余りにも文献資料（史料）に依拠し過ぎてきた歴史教育の有り方を再構築する上で大きな力となりうるのではないだろうか。

② 生徒が自ら調査に携わることによって、主体的な学習態度を養うことができる。

オーラル・ヒストリーの学問的成果を教材として利用することにも十分な意義は認められるが、できれば生徒自らが野外調査を行なうことが望ましい。“Foxfire”の例からも明らかなように、そこにおいて立ち現れてくる困難な歴史的社会的問題とじかに直面することによって、生徒はそうした問題をより切実に、しかも新鮮に自分のものとして受けとめることができるのである。そうした直接的な体験は、生徒たちの判断力、思考力、観察力など問題場面の解決に必要とされる諸能力を育成するであろうし、また豊富な体験を持った人々との交流は彼らの人間観・世界観に大きな影響を与え、彼らの人格的成長を促すであろう。

③ 地域の文化遺産の存在を認識することによって、文化的アイデンティティーを確立することができる。

比較的行動範囲の狭い中高校生によって行なわれるオーラル・ヒストリーの調査は、必然的に地域的束縛を受けやすくなるが、そのことは裏を返せば地域社会の歴史・文化に深く入り込み、それについての認識を新たにすることに恵まれることを意味する。“Foxfire”の場合について見ても、生徒たちは地域の人々（特に老人）との協同作業と交流から多くのものを学び受け継いでおり、しかもそのことによって自らが住む地域への帰属感と誇りを強めている。従って、この体験が生徒たちの文化的アイデンティティーの形成を促すにあたって大きな影響を持ったことは疑いを入れないであろう。教育現場におけるオーラル・ヒストリー調査の実践が“Foxfire”の活動の基盤となった南部アパラチア地域のようにかねてより偏見の対象となってきた地域や、少数民族（アメリカインディアンや、新来のメキシコ系移民チカーノなど）の多い地域の学校において特に盛んな理由は、その学習活動がそこに住む若者の文化的アイデンティティーの確立に資するものであるからに他ならない。こうした点において、オーラル・ヒストリー調査の方法論は地域学習としても独自の位置をも占めるものとなっているのである。

「オーラル・ヒストリー」を中等教育の教材として利用しようとする試みは1960年代末期に始まり1970年代に著しい発展を見たが、アメリカ社会が保守化傾向を強めていった1980年代にあってはその革新性のゆえに目立った展開を示すことはできなかった。しかしそこに内包された理念とその教育効果の著しさは、再び学校の荒廃が叫ばれ、またヒスパニックなどの新たな移民の流入によって激しい変化を遂げつつある現在のアメリカ社会においてこそ必要とされるものであろう。来るべき時代において、“Foxfire”に代表される先駆的な試みが残した課題を克服し、学校教育、そして歴史教育に新たな可能性を開く新たな実践が生まれることを確信して、この稿の締め括りとしたい。

<註>

- (1) 川田順造『無文字社会の歴史——西アフリカ・モシ族の事例を中心に——』, 同時代ライブラリー16 (岩波書店, 1990年) p. 20.
- (2) Charles T. Morrissey, "Oral History as a Classroom Tool", Social Education, 32, 1968., 547.
- (3) Ibid., 546-549.
- (4) Eliot Wigginton, Sometimes a Shining Moment: The Foxfire Experience, New York: Doubleday, 1985., p. 126.
- (5) Ibid., pp. 20-21.
- (6) Ibid., pp. 33-34.
- (7) Ibid., p. 50
- (8) Eliot Wigginton(ed.), The Foxfire Book, Doubleday: New York, 1972., pp. 12-13.
- (9) Gary Armstrong Parks, "Foxfire: Experimental Education in Rural America", Jonathan P. Sher(ed.), Rural Education Urban Nations: Issues and Innovations, Westview Press: Boulder, 1981., p. 286.
- (10) これについては, Wigginton, Sometimes a Shining Moment および Parks を参照のこと。
- (11) John Puckett, Foxfire Reconsidered, Univ. of Illinois Press, 1989., p. 212.; John Dewey, "Education and Social Change", Jo Ann Boydston(ed.), John Dewey: The Later Works, 1925-1953, Southern Illinois Univ. Press, 1986., p. 409.
- (12) Wigginton, p. 74.
- (13) Wigginton(ed.), p. 144.
- (14) Eric Erikson, Identity: Youth and Crisis, Norton: New York, 1968., pp. 53-70
- (15) G. W. オルポート, 原谷達夫・野村昭訳『偏見の心理』 (培風館) pp. 37-39.
- (16) Puckett, p. 128., pp. 90-91
- (17) Parks, pp. 289-290